

「ありがとうございました。」関係者の皆様にまずお礼を言いたいです。今回のベトナム行きは正直、本当に行けるのか心配でした。しかし、なんとか無事に行って帰ってくることが出来、ほっとしています。

私は2年前にもアジアの子に参加させていただきました。前回お世話になった、クイさん・クックさんに再会できました。毎回嫌な顔ひとつせず温かく迎えてくれる彼らに感謝せずにはられません。ホームの子どもたちも、元気いっぱい笑顔を見せてくれました。

今、ベトナムは大きな流れに乗っています。日本のODAにより日本の大手ゼネコンが高速道路、空港、橋の建設をあちこちで行っています。2年前より目に見えて発展しておりました。しかし、その影にはまだまだ痩せ細った身体で笑いかける子どもたちが沢山います。アジアの子の活動が継続されますよう、願っております。

経済学部 経営学科2年の大庭有加里

ベトナムの現状を詳しく知ることができました。そして、ホームの子供たちと触れ合い、子供たちの純粋さと人の温かみを感じました。戦争の消えることのない傷跡や国内での経済格差など、問題も多くありますが、ベトナムはほかのアジアの国々と同じように経済発展をとげていると感じました。しかし、まだまだ支援を必要としている子供たちは大勢いるということを知ることができました。ベトナムについて学び、私自身も様々な意味で成長することができたと思います。



ベトナムツアーの記念撮影
(左)

<連絡先>

アジアの子教育基金山口大学事務局
〒753-0841 山口市吉田1677-1 山口大学経済学部商品資料館
tel/fax: 083-933-5512 (呼)
e-mail: asianoko@hotmail.com
URL: <http://asianoko1.econo.yamaguchi-u.ac.jp>



2007年総会報告

2007年度総会報告

2007年度通常総会が昨年9月23日(日)14:00から山口大学経済学部大2会議室(山口市大字吉田)において開催され、下記議案が承認された。

【報告事項】1. 2006年度事業報告。 2. 2006年度収支計算報告。

【決議事項】1. 2007年度事業計画(案)。 2. 2007年度収支予算(案)。

上記報告事項並びに決議事項が承認された後、【その他】の項のところで本会の活動を実質的に支えてこられた山野勝也事務局長が昨年5月31日急逝され、その打撃は大変深刻であり組織的立ち直りには相当程度時間を要すると推察されるので新規活動は抑制して当面は現行の活動水準・活動内容を維持継続していくこととなった。

なお故山野勝也事務局長の奥様である山野栄子様から昨年の7月10日本会に対し30万円という多額のご寄付を賜りました。事務局長の本会に対する生前の献身的に活動してこられた様子を身近に見てこれたお決めいただいたとのことでした。本会といたしましては山野家の皆様方のお気持ちにこたえるべく本会の活動を維持発展させるべく大事に使わせていただきたいと思います。

最後に今年度総会報告が年度末になったことをお詫び申し上げます。新しい本会の事務所は近接する東亜経済研究所の新設工事のためこれまで使用が困難でしたが、その工事が完了し移転が間もなく完了するところまで参りましたのでこれまでの遅れを取り戻すべく頑張っていきたいと考えています。今後ともご支援の程宜しくお願い申し上げます

ベトナム訪問してきました

～目次～

2007総会報告	1 PAGE
ベトナム訪問報告	2 PAGE
報告事項	3 PAGE
決議事項	4 PAGE
ベトナム訪問報告	5 PAGE
	6 PAGE



里子に再会する西村さん(右上)

♪子供達との触れ合い♪

経済学部国際経済学科4年 中里文香



センターの人の話によると、ダナンには約4万人の子供が貧しく暮らしているらしい。そのうち150人の子供がセンターにいたと言っていた。

センターの子供達は、貧しさを全然感じさせないくらい元気な子供ばかりで、人懐っこかった。カメラが珍しいのかデジカメを取り合っ

て、写真撮影をしていた。そんな姿、笑顔がすごく可愛かった。職業訓練所の子供は、午前中は訓練、午後は仕事をしている子もいた。日本では昼間は学校に行くのが当たり前だったから、学校に行きながら働く子供がいるという現実を突きつけられた。ベトナムに行って、私は今後もこの活動を続けていきたいと感じた。本当に参加して良かったと思った。今回計画してくれた西村さん、クイサン、クックサンを初め、多くの人々に感謝いたします。

ベトナムに行って

山口大学経済学部4年 大垣健

純粋なこどもたちの笑顔は眩しくて太陽のようだった。ベトナムのまちは日本とは違った活気に溢れていた。いつの日かベトナムが日本以上に発展するかもしれない。そう感じさせるだけの力をもった町並みがそこにはあった。一方で、日本では考えられないような生活をしている人びとも多くいた。国が発展する一方で、格差拡大など深刻な問題が発生していたのである。今は、国民に対して還元がないために本当の意味での豊かさは得られていないが、教育に非常に力を入れているこの国はそう遠くない将来、きっと本当の意味での豊かさを手に入れるのではないかと私は感じた。

ダナンの施設を訪れて

経済学部 国際経済学科 2年 本田直美

私はダナンのセンターを訪れて、すごく貴重な経験ができたと思います。私の中ではセンターの子どもたちは、貧しい子どもたちという固定観念があったのですが、そんな観念はまったく無意味なものでした。金銭的な生活面では貧しいかもしれませんが、センターの子どもたちは皆輝いていました。人が生きていく上で、裕福か、そうではないのか、ということやはり重要なことかもしれませんが、しかしそれ以上に重要なことは自らのおかれた環境をどう生きていくのか、ということではないのかと思いました。そんな単純なことを彼らのくったくのない笑顔が教えてくれました。私はこの旅で得た多くのことをこれからの日々の生活の中でも活かしていきたいと思います。

今回のベトナム訪問で、私は多くの人と接することが出来ました。いろんな形で出会った人、ホームの子ども達など、みんなが優しく接してくれ本当に嬉しく思いました。里子のホームや職業訓練センターを訪問した際には、実際に子ども達の様子を見たり、一緒に触れ合ったりすることで、現地でしか味わうことの出来ない様々なものを得る事ができました。そして、どんなことも見ていだけじゃなにも始まらない。行動にうつすことがとても大事なことはないかと思いました。今回の訪問は、多くのことを学び、考えさせられ、私自身さらに成長できた良い体験でした。有難うございました。

山口大学経済学部経済法学科2年 川崎明日香



ベトナムへのスタディツアーに参加して、多くのことを知り、身につけることができました。職業訓練センターや里子の子供たちの家を訪問して、現地に行かなくては分からないベトナムの現状を詳しく知ることができました。そして、ホームの子供たちと触れ合い、子供たちの純粋さと人の温かみを感じました。戦争の消えることのない傷跡や国内での経済格差など、問題も多くありますが、ベトナムはほかのアジアの国々と同じように経済発展をとげていることを感じました。しかし、まだまだ支援を必要としている子供たちは大勢いるということを知ることができました。ベトナムについて学び、私自身も様々な意味で成長することができたと思います。

山口大学経済学部国際経済学科千葉誠

2回目の訪問で活気ある街へと発展したダナンの変化を感じた。しかし、子供たちの人懐っこい笑顔は2年前とは全く変わっていなかった。食事を一緒にした時、自分の分より先に取り分け、皿が空かないうちに「これが美味しいから！」とジェスチャーで伝えてくれ、次から次に盛ってくれたのが印象的でその優しさがすごく嬉しかった。そんな一日一日を強く笑顔で生きている子どもたちを見て、自分自身を振り返るいい機会にもなった。私は3年間のアジアの子の活動を通して大変貴重な体験をした。現地に行って、自分の目で見て、話を聞いて、一緒に笑ったことは一生忘れない…。今後もどんな形であれ子どもたちの笑顔を守る活動に携わっていきたい。



山口大学経済学部国際経済学科渡司 紗裕美

「ベトナム訪問」

山口大学 教育学部 国際理解教育コース 4年 宇都宮 華奈

アジアの子ども教育基金の視察旅行は二度目の参加で、この度初めてベトナムを訪れた。昨年訪れた中国の農村地帯と同様の風景がどこまでも続いているというイメージが自分の中にあった。しかし、ホーチミンへ降り立つと、その予想は裏切られた。町中無数のバイクが激しく行き来し、街並みは飲食店や外資系企業の店等が多く見受けられ、貧困に苦しむ人が存在するとはあまり思えなかった。

次の日、ストリートチルドレンの家を訪問し、貧困などの理由から族と一緒に暮らせないため、集団生活を送る子どもたちと対面した。4、5歳から高校生までの子どもたちが5つの施設に分かれて暮らしていたが、どの家の子どもたちも私たちを暖かく迎えてくれた。子どもちと遊びや食事を通して触れ合うことで、日本の児童となんら変わら、素直で明るく元気いっぱいな姿をみることができた。と同時に、切にあれこれ世話をやいてくれる子どもたちは、幼いながらも現状にさず相手を思いやる優しさをもっていると感じた。比較的発展したダンの町においてこの様な子どもたちが多数存在するということは、ベトナム全体だったらさらに多いと思う。そして、それがさらに世界に広がったら…。

この旅を通じて、子どもたちから笑顔と助け合いの精神を学んだ。そして、これまで以上に支援の大切さを感じた。来年からは社会人となるが、決して自己満足の援助では終わらせず、子どもたちの生活やあの素敵な笑顔を支えるために自分自身ができることを考えて実行していきたいと思った。



家
て
た
な
親
屈
ナ
ト